

## 草の根を

川名将義

今回は俳人であり、連句人でもある（非懐紙連句の提唱者として有名＝紙数の関係で詳細は省略）橋 閒石の滑稽句について述べてみたい。

雪に暮れ恋など吊るす釘うたん

柱に釘を打って、何を釣るすのも自由であるが、「恋」という虚を斡旋したのが誠に愉快である。

草の根を分けても春を惜しむかな

「草の根を分けても探す」という諺があるが、それを振ったところに、滑稽さが醸し出されている。

でもこれは「秋惜しむ」でも良いのではないか、とおっしゃる向きもあるかも知れないが、ものみな枯れ急ぎ、蕭条とした暮秋よりも、草木の萌え、茎立っている春を惜しむ方が、「草の根を分けても」の措辞が一段と生きてくると思う。このあたりは閒石の上手さと言える。

顔じゅうを蒲公英にして笑うなり

人の笑顔には千差万別あり、いろいろな形容が可能だと思う。

だが、例えば植物で形容するとして、これが向日葵では大きすぎるし、チューリップではどこか間延びしている感じがする。

この句からは顔じゅうをタンポポのようにして、春の野原で笑っている女の子の笑顔が想像される。キュートな滑稽句である。

陰干しにせよ魂もぜんまいも

山菜を採ってきて、保存食用にわらびやぜんまいを陰干しにする。

山村ではよくやられていること。その陰干しに、こともあろうに陰気に湿っている「魂」をせよと言っているのである。

日向に干して、もし干乾びでもしたら大変だからである。

この大胆な発想には、思わず吹き出してしまうし、納得させられてしまう。

詩も川も臍も胡瓜も曲りけり

俺はこれほどにへそ曲がりな人間なんだと、一見単なる滑稽句に作っているながら、実は俺は曲学阿世の徒ではないぞ、と気張っているところが、より滑稽ではないだろうか。

階段の無くて海鼠の日暮かな

橋 閒石の代表句中の代表句。

階段が無いから海鼠は一日中海の中に動かずに居る。

ではそこに階段が有ったら、海鼠はとんとんと階段を上って、陸に上がるであろうか。

無論そんなことはないのである。

海中にじっとして日がな動かない海鼠は、実は階段が無いからだと言うあたりが、  
なんとも滑稽なのである。

だがこの句の裏には、この海鼠のように自分も階段が無いことに理由を借りて、  
世の荒波を避けた海中で、何を成すでもなく過しているうちに、はや人生の日暮が  
そこまで来てしまっている… というペーススが滲み出ている句なのである。

八木会長のおっしゃっている『滑稽にはペーススを』の見本のような名句である。

次回の執筆もお許しがあれば、中原道夫の滑稽句について述べてみたい。